

## アカホシカブトクラゲ

久保田 信

56



このクラゲはクシクラゲの仲間アカホシカブトクラゲである。体表にうっすらと縦筋が幾本も見える。これらがクシクラゲ類特有の櫛板(くしいた)だ。ちょうど平面しか見えていないが、中央に2本

の短いのと、端っこに長い2本が見える。これら8本でゆったりと浮遊する。普通種のカブトクラゲによく似ているが、体内に赤い斑点を持つので、すぐ区別が付く。真ん中の胴体から2個の羽のような袖状突起が張り出している。そこは閉じているので、外見は楕円(だえん)体に見える。実は、袖状突起の中に赤い斑点がいくつも規則正しく配列している。これが本種の特徴だ。だが、その斑点の正体は不明。どうしてそこに色素のようなものがたまっているのか解明され

△  
うっすらと櫛板が見えるアカホシカブトクラゲ

ていない。新種記載されたのは半世紀前の1964年。その年の1月6日に瀬戸漁港で発見され、瀬戸臨海実験所の時岡隆先生によって学名が付けられた。瀬戸漁港には冬季になるとまれにクラゲ類がどっさり押し寄せることがあるが、当時も同じような状況で、カブトクラゲやチョウクラゲなどの他にヒドロクラゲ類もあり、夜光虫の量はとりわけ多かったそうである。

しかしながら、本種はたった2個体しかいなかったという事で、昔から珍しい種なのである。筆者は、インドネシア大津波の時にタイ国にいた。バンコク近くでシュノーケリングをしていた際、このクラゲと見える個体を見掛けた。本種はひょっとしたら南方系なのかもしれない。

本種は珍しいクラゲなので、初確認地である白浜周辺でもなかなか採れない。画像の個体は、近年、白浜町瀬戸漁港で捕まえたものだ。

(京都大学准教授)